

《昭和女子大学の挑戦》

テンプル大学との連携による「スーパーグローバルキャンパス」

昭和女子大学理事長・総長
坂東 真理子



グローバル人材という性差に捉われないキャリア

昭和女子大学は、2020年に創立100年を迎える女子大学である。20世紀の間は「良妻賢母教育」を標榜し、評価も頂いてきたが、21世紀の社会を生きる女性にとって必要な力を身につける教育とは何かという課題に向き合ったとき、さらなる変革に取り組む必要があった。社会が大きく変化する中で、女性達は、夫や子どもを通じてのみ社会とつながるという生き方ではなく、自分自身が社会と直接つながり、社会から必要とされ、社会を支え、経済的にも自立可能な存在にならなければならない。私自身、公務員としてのキャリアを通じて、女性の社会的役割に対して政策的に取り組み、わが事としても実感してきたことである。

社会を見渡せば、大変な勢いでグローバル化は進んでいる。にも拘わらず、「真のグローバルプレイヤー」といえる人材は枯渇している状況である。社会参加において、いわばレイトカマーである女性は、男性が多く活躍し飽和状態にある分野ではなく、性差に捉われず人材需要が圧倒的に大きい分野でこそ活躍が期待される。そこで私達は、グローバル社会で求められる力の育成が重要であると捉え、グローバルで輝ける人材を育成する大学を目指そうと決めた

テンプル大学日本校(TUJ)について

テンプル大学は、1884年米国ペンシルベニア州フィラデルフィアに創立。テンプル大学日本校は、海外大学の日本校第1号として1982年に創立された。現在日本に立地する唯一の米国の4年制州立大学。学部課程・専攻学科は、アート学科・アジア研究学科・コミュニケーション学科・経済学科・教養学科・国際関係学科・国際ビジネス学科・日本語学科・政治学科・心理研究学科。現在は東京都港区にある。

のである。一方、全寮制の海外キャンパスである昭和ボストンの開設(1988年)や中国の上海交通大学との協定締結(1992年)等、国際化への取り組みをそれまでも進めてきたことは、私達の「資産」でありアドバンテージでもあった。それらを生かし、2013年にはグローバルビジネス学部を開設、2013年～2017年のグローバル人材育成推進事業も私立女子大学で唯一採択される等、グローバル人材育成のための挑戦を進めてきた。

テンプル大学との提携は、「時間を買う」戦略

そして昭和女子大学は2019年8月にキャンパス内に建設した新校舎を、米国ペンシルベニア州立テンプル大学日本校(以下TUJ)と共有し、「スーパーグローバルキャンパス」を実現させる。日米のキャンパスを同一敷地内に置くのは日本で初めてのことである。TUJは、本校と同じカリキュラムで、同レベルの学修成果を目指す大学であり、昭和女子大学の学生は、日本にいながら米国の教育を受け単位を取得できるようになる。

この「スーパーグローバルキャンパス」創出の構想は、TUJ学長であるブルース・ストロナク氏と私との会話から5年ほど前に始まったものであった。

昭和ボストンへの留学では、2年次に半年間英語を学ぶのだが、帰国後の英語力のフォローアップが当時の課題だった。一方、TUJでは東京・港区で30年以上教育をし、英語によるビジネスパーソン対象の公開講座等優れた活動をしていたが、日本での認知をさらに高めるため、よりよい教育提供の場を求めていたことから、双方の課題を解決し、特色や強みを生かした連携ができないかと検討をスタートしたのである。まずは、科目等履修プログラムの協定を締結し、



昭和女子大学のある東京都世田谷区太子堂に開設されるスーパーグローバルキャンパス。敷地面積は約7,600平方メートル。テンプル大学は8月半ばに現在の東京港区にあるキャンパスから全学部が移転し、9月から授業を開始する。スポーツ施設やカフェテリア、講堂などは、昭和女子大学の既存施設を利用する。昭和女子大学の学生、昭和女子大学付属の初等中等高等学校の生徒、イギリスの義務教育課程の学校「ブリティッシュ・スクール・イン・トウキョウ昭和」の生徒と、テンプル大学の学生計9000人が、世田谷区のスーパーグローバルキャンパスで学ぶ。

昭和ボストンから帰国した学生達がTUJのプログラムを受けられるようにした。その成果も上がっていたのだが、大学間の移動に時間がかかり不便であった。今回TUJが移転し、校舎が隣接することでその課題も解決される。

これまで昭和女子大学は「学生を外へ送り出すグローバル化」を進めてきたが、さらなるグローバル化のためには、海外の学生を惹きつける力が必要である。そのためには、外国の教員を海外から招きプログラムを確立するのが王道であろう。だがそれには時間もお金もかかってしまう。企業においてはM&Aによって「時間を買う」といわれるが、海外の大学と提携をすることによって、グローバル化を一気に加速させる。これが昭和女子大学の戦略である。

ダブルディグリー制度導入、教職員の交流により、ダイバーシティの実現を目指す

今後は、英語力のブラッシュアップという目的だけでなく、国際化の多様な発展が可能になるであろう。教員同士が交流し、お互いの学生に向けて授業を行うことはもちろん、職員間でも交流することで、例えばファンレイジングや広報等、アメリカの大学における進んだ取り組みを学んでいきたいとも考えている。また、昭和女子大学が実施する日本文化や古典芸能に関する講演を通じた交流等も期待できるであろう。そして何より、クラブ活動や学園祭など様々なスチューデントアクティビティを通じた学生同士の交流の場となることで、生きたダイバーシティの在り

方を実感してほしいと思っている。TUJの学生はアメリカ人が4割、アジアからの留学生や日本人の帰国子女等60カ国から成る。様々な国や地域の学生が集うことで、キャンパス全体がダイバーシティの場となるであろう。

「スーパーグローバルキャンパス」は、9月からの授業開始に向け多岐にわたる検討事項に急ピッチで対応している。しかし、グローバル化への取り組みは、ここからさらに加速させていきたいと考えている。まずは、ダブルディグリー制度の導入である。学生は、昭和女子大学3年、テンプル大学2年の計5年間で、両方の学位取得を目指し学ぶ。そのためには、テンプル大学の学生にとっても、

昭和女子大学が魅力的であることが不可欠である。そういった双方にメリットとなることを実現するための体制づくりも進めている。

また、これまで多くの留学生を送り出してきた経験を生かし、学生がハードなアメリカの大学の授業についていけるような教員のサポート体制も構築した。学生・教員間の「顔が見える距離」が生み出す信頼関係は、これまでも就職実績やキャリア支援の場面で高い成果を果たしてきたものであり、昭和女子大学にとっての大きな「含み資産」として捉えている。

前例のないチャレンジで、日本社会の同質性や内向き志向を変える起爆剤に

社会参加における男女格差は、日本には厳然と存在する。その中で女性らしく生きる道を教えるという役割も女子大学にあるだろう。しかし、グローバル化やダイバーシティが急速に進む今、女性をそこから隔離するわけにはいかない。私は、このキャンパスで育った卒業生達には、日本社会に存在する同質性志向や内向き志向を変える起爆剤として活躍することを望んでいる。

日本とアメリカの大学がキャンパスを共有するという世界に前例のないチャレンジな取り組みが、ここ日本において実現できたということは、世界に向けてもよい刺激となるであろう。今後もさらに先進的な姿を発信し続けられる存在でありたいと考えている。

